様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：８４２０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０８５４

研究課題名（和文）日本中世における「水辺推移帯」の支配と生業をめぐる環境史的研究

研究課題名（英文）An environmental historical study concerning control of, and subsistence-related activities in, the "waterside ecotone" in medieval Japan

研究代表者
橋本　道範（HASHIMOTO, Michinori）

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・専門学芸員

研究者番号：１０３４４３４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：陸域と水域とが、常に、あるいは周期的に推移する「水辺」を対象として、主体である自然と主体である人間とがどのように互いに影響を与えながら変化したのかについて検討した結果、テーマ１「陸域と水域とが推移することを前提とした支配システムの解明」については、土地調査により河川と認定され、税が免除される「河成」史料を検出した「播磨国矢野庄河成データベース」を作成してweb上で公開した。また、テーマ２「陸域と水域とが推移するという環境そのものを利用した生業のあり方と村落との関わり」については、「水辺」の村落の生業が稠密化することを論証した『日本中世の環境と村落』（思文閣出版）を公表した。

研究成果の概要（英文）：Targeting the "mizube" zone, the always or periodically changing waterside ecotone that represents a transition from land to water, my study of shifts in how two principal actors, nature and human beings, have influenced each other has resulted in the following outcome:Theme 1) "Elucidation of a land-tenure system based on the premise of shifts between land and water". I compiled the "Harima Province Yano Estate Fluvial Database" of "fluvial" historical records, which include information about land recertified as rivers and thus made tax-exempt, and uploaded the database publicly on the World Wide Web.Theme 2) "The relationship between villages and the ways the transitional environment between land and water have been utilized for subsistence activities". I published a book, "The Environment and Villages in Medieval Japan" (Shibunkaku Co., Ltd.), in which I argued that intensification and localization of subsistence activities has taken place in waterside ("mizube") villages.

研究分野：歴史学（日本中世史）

キーワード：環境史　琵琶湖　漁撈　消費　村落　内水面　フナ属

１．研究開始当初の背景

(1)研究を申請した 2010 年は、日本中世史分野において、高木徳郎 2008、佐野静代 2008、水野章二 2009 など、環境史に関する著作が相次いで刊行され、活発な議論が行われていた時期であった。しかしながら、環境史について定義も定まっておらず、議論が錯綜しているとの批判もあった（水野章二 2009）。

(2)また、2010 年は、安室知、菅豊などの民俗学研究を受けて、佐野静代などによって、陸域と水域とが推移する環境の生態系の実態とそこにおける生業のあり方が具体的に明らかになってきた時期であった。しかし、陸域と水域とが推移する環境を前提とした支配のシステムについては、まだ未解明の部分もあり、研究の進展が期待されていた。

２．研究の目的

(1)研究の目的は二つある。一つは、「陸域と水域とが推移するという環境を前提とした支配システムのあり方の解明」である。特に、陸域（耕地）が水域化した際に、その空間を把握するシステムがどのようなものであったかを解明することである。

(2)もう一つは、「陸域と水域とが推移するという環境を利用した生業のあり方と村落との関わりの解明」である。特に、推移する環境は魚類の産卵場でもあったため、そこは多様な主体による複雑で緻密な漁撈が併存する空間であった。そうした生業が展開する中で、二重の構成をもつ村落のうち、特に下位の村落（ムラ）がどのような役割を果たしていたのかを解明することである。

３．研究の方法

(1)「陸域と水域とが推移するという環境を前提とした支配システムのあり方の解明」については、最初のフィールドを播磨国矢野庄（兵庫県相生市）とすることとし、水域化して無税地となったことを示す「河成」のデータベースを作成することにした。また、矢野庄の生業について現地の聞き取り調査を行った。

(2)「陸域と水域とが推移するという環境を利用した生業のあり方と村落との関わりの解明」については、最初のフィールドを近江国蒲生郡奥嶋地域（滋賀県近江八幡市）及び近江国堅田（滋賀県大津市）とすることとし、フナ属の生態や近過去の漁撈の実態について現地での聞き取り調査を行った。また、大嶋神社・奥津嶋神社や菅浦文書の調査を滋賀大学経済学部附属史料館などで行った。

(3)「陸域と水域とが推移するという環境」そのものについて、滋賀県の野洲川下流（野洲市）の遺跡から採取された堆積物の花粉分析により、中世の環境を復元した。

４．研究成果

(1)陸域と水域とが推移する環境、生態学的にエコトーンと呼ばれる環境を前提としていかに支配が組み立てられ、そこにおける地域資源がいかに配分されていたのかを解明するために、すでに多くの研究・調査の蓄積がある播磨国矢野庄の「河成」のデータベースを作成し、web 上で公開した。現在、歴史地理学会での報告に向けて、研究史を参考にしながら、まず、「河成」が発生する環境とはどのようなものであり、そこにはどういった地域資源が存在していたのかを概観し、次に、「河成」という制度を紹介して、その上で、矢野庄では、何年にどの地域でどの程度の「河成」が認定されているのかなどその基礎的な「河成」認定の実態を明らかにし、最後に「河成」認定と「河成興行」をめぐる、いうなれば小さな政治の分析から、「河成」が生業にとってどのような意義を有していたのかについて考察している。

(2)「陸域と水域とが推移するという環境を利用した生業のあり方」については、消費論から生業のあり方を考察する道を選択した。第一にフナ属の生態を分析の対象とすることとし、首都消費と生業とフナ属の生態との関係を解明した。まず「年中行事と生業」に関わる研究史を整理して消費研究の重要性を指摘し、中世下鴨神社における御厨の成立が神社の主導によるものであったことに注意を促した。そして、年中行事書等の分析から旧暦四月（五月頃）の賀茂祭と旧暦一一月（一二月頃）の相嘗会という消費の二つの核が存在していたとの見通しを示した。その上で、参考として山科家の日記類に登場するフナ属の記事よりその消費暦の概要を把握し、一五世紀の山科家ではグレゴリオ暦で「四月から六月」という贈答と貢納のピークと、「一二月から二月」という貢納のピークがあったことを明らかとした。これらのうち、「一二月から二月」までの消費はあくまでも貢納のピークであり、漁撈は消費者の都合に応じる目的で展開していた可能性を指摘した。

(3)「陸域と水域とが推移するという環境を利用した生業のあり方」については、第二に環境史研究を目的とした消費研究を志し、一五世紀における堅田漁撈の実態を追究して、旧暦三月から四月にかけての他浦地先水面内における夜間密漁という漁撈形態こそがこの段階の歴史的特質であると措定した。次に、その主な対象魚種と漁期を検討し、王権にまつわる物語と結びつけられて一三世紀頃に名産化した「堅田の鮒」こそが漁獲対象であったと考えるのが最も妥当であり、四月から六月にかけて産卵のため湖辺に接近する産卵期のフナ属がターゲットであったと推定した。そして最後に、山科家の日記類を素材として首都京都の貴族社会におけるフナ属

消費の実態解明を試み、贈答、貢納と上納、飲食のいずれをとっても産卵期に消費のピークがあることから、旬が成立していたことを明らかにした。これにより、魚類の季節的な生態に規定された旬の時期の消費が、産地の漁撈と連動しており、漁撈形態そのものにも影響を与えたことが明確となった。

(4)「陸域と水域とが推移するという環境を利用した生業のあり方と村落との関わりの解明」に関しては、政治史の枠組みのなかで立論された中世村落の二重構成論を複合生業論の立場から再構築することを目指し、「生業の稠密化」論を提起した。まず、奥嶋周辺の陸域と水域とが推移する「水辺」という環境に注目して、そこがクリーク地帯で、エリ漁の漁業権が成立していたことを明らかにした。次に、一三世紀前後の漁撈の展開方向を検討し、自然を克服して面的に利用を拡大しようとする方向性のものではなく、限られた空間で、自然のあり方をより巧妙に利用していこうという方向性のものであると考え、「資源のより稠密な利用」と位置づけた。そして、最後に、それぞれが「資源利用の稠密化」に向けてせめぎ合っている中で、庄郷だけがそれを抑制しようとする方向性を示していたことを確認した。その理由について、「小規模で素朴な漁撈」の個別の漁業権を自己否定するような微細な利害の調整は、庄郷のような大きな村落では不向きで、自然と密着した身近な小さなムラであるが故にできたのではないかと結論づけた。

(5)「陸域と水域とが推移するという環境」そのものについて、滋賀県の野洲川下流（野洲市）の五条遺跡から採取した堆積物資料の花粉分析を行った結果、中世には森林相が乏しく、好湿性の植生が展開しており、低湿な地形環境であったことが確認された。また、比較的短期間で環境が変動することが明らかになった。

＜引用文献＞
①高木徳郎、日本中世地域環境史の研究、校倉書房、2008、
②佐野静代、中近世の村落と水辺の環境史―景観・生業・資源管理―、吉川弘文館、2008、
③水野章二、中世の人と自然の関係史、吉川弘文館、2009、

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①宮本　真二　他、濃尾平野，庄内川低地，平手町遺跡における地形環境の変遷と遺跡立地、半田山地理考古、査読無、３、2015、pp.1-7、
②宮本　真二　他、近江盆地南東部，野洲川下流域平野，五条遺跡における中世庭園成立期の植生変化、半田山地理考古、査読無、２、2014、pp.1-7、
③宮本　真二、地理学と環境考古学、動物考古学、査読有、30、2013、pp.435-442、
④宮本　真二、近江盆地東部，野洲川下流域平野における地形環境の変遷と遺跡立地、半田山地理考古、査読無、１、2013、pp.1-10、
⑤宮本　真二、中池見湿原堆積物の花粉化石からみた最終氷期以降の植生変遷、地域自然史と保全、査読無、35-2、2013、pp.95-102、

〔学会発表〕（計１０件）
①宮本　真二（2014 年 5 月 17 日）瀬戸内臨海平野の地形環境変遷と遺跡立地に関する予察的検討、第 57 回歴史地理学会大会、長崎外国語大学（長崎県長崎市）、[口頭発表]、
②橋本　道範（2014 年 3 月 14 日）一五世紀における魚類の首都消費と漁撈―琵琶湖のフナ属の旬をめぐって―、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館（滋賀県草津市）、[口頭発表]、
③橋本　道範（2013 年 12 月 25 日）戦後における歴史学の自然環境理解と村落論、裁許状研究会、こどもみらいかん（京都府京都市）、[口頭発表]、
④橋本　道範（2013 年 12 月 1 日）河成データベースの作成について―播磨国矢野庄を事例として―、第 20 回環境史研究会、相生市民会館（兵庫県相生市）、[口頭発表]、
⑤橋本　道範（2013 年 5 月 23 日）日本中世の「水辺」と村落―近江国蒲生郡奥嶋の事例から―、鎌倉遺文研究会第 191 回例会、早稲田大学文学学術院（東京都新宿区）、[口頭発表]、
⑥宮本　真二（2013 年 5 月 19 日）近江における平野の地形環境の変遷と土地開発、第 56 回歴史地理学会大会、砺波文化会館（富山県砺波市）、[口頭発表]、
⑦橋本　道範（2013 年 3 月 15 日）日本中世における「水辺」と村落―「資源のより稠密な利用」をめぐって―、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館（滋賀県草津市）、[口頭発表]、
⑧橋本　道範（2012 年 3 月 11 日）日本中世における魚介類の消費と漁撈―琵琶湖のフナ属をめぐって―、裁許状研究会、ホテルグランティア氷見　和蔵の宿（富山県氷見市）、[口頭発表]、
⑨橋本　道範（2011 年 12 月 16 日）日本中世における年中行事と生業の構造―琵琶湖のフナ属の生態を基軸として―、琵琶湖博物館研究セミナー、琵琶湖博物館（滋賀県草津市），[口頭発表]、
⑩橋本　道範（2011 年 4 月 30 日）自然環境と戦後の日本中世史研究に関するメモ、裁許状研究会、こどもみらい館（京都府京都市）、[口頭発表]、

〔図書〕（計５件）

橋本　道範、思文閣出版、日本中世の環境と村落、2015、450
宮本　真二　他、海青社、自然と人間の環境史、2014、396
Michinori Hashimoto　他、Springer、 LAKE BIWA-Interaction between nature and people、2013、269-273
橋本　道範、吉川弘文館、環境の日本史３　中世の環境と開発・生業、2013、189-216
橋本　道範、岩田書院、琵琶湖と人の環境史、2011、125-149

〔その他〕
ホームページ等
http://www.lbm.go.jp/emuseum/seika/kawanari_db.html

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　道範（HASHIMOTO, Michinori）
滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・専門学芸員
研究者番号：１０３４４３４２

(2)研究分担者
宮本　真二（MIYAMOTO, Sinji）
岡山理科大学・生物地球学部・准教授
研究者番号：　６０３５９２７１

(3)連携研究者
水野　章二（MIZUNO, Syoji）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：４０１９０６４９